

ラニー・エーベンシュタイン著「フリードリヒ・ハイエク」春秋社 2012年8月20日刊を読む

充実した晩年のハイエク先生

1. (1) 毎日の過ごし方も変わった。これまでは朝から晩まで仕事を続けられたが、この頃になると夜は新しい研究には取りかからず、文献を読むだけにした。
 - (2) 朝は、二時間ほど気力が続く。
 - (3) 「他に邪魔が入らなければ、新聞を読んだ後すぐに仕事に取りかかる」。
 - (4) コーヒーを一杯飲めば、もう少し長く仕事をしていただけることもあるが、「それでもそんなに長くは続かない」という。
2. Q. 仕事をするときは机に向かっているのか、歩きながら考えるのか。どうすると仕事はかどるのか。
 - A. ハイエク
 - (1) 安楽椅子にゆったりと座って、膝の上に紙をのせて書く。
 - (2) 読む時期と書く時期が別々にあるというべきだろうか。
 - (3) 色々と読みたい時には、同時に執筆も行うことはできない。
 - (4) 時には二、三ヵ月ただ読んでいるだけのこともある。
 - (5) メモ程度は書くが、体系的に考えをまとめることはしない。
 - (6) 執筆に取りかかると、本も参考にするが、今度はそれを読み込むことはしない。
 - (7) 少なくとも、執筆しているテーマに関するものは読まない。
 - (8) 夜には、何か別のものを読む。
3. (1) まずカードにアイデアを書き留め、それから「とにかく書いて、書いて、書きまくる」というのが、彼の執筆方法だった。
 - (2) カードをいつも持ち歩いていて、思いついたことをすぐに書き留めるようにしていた。
 - (3) 「私の理論はすべて、カードのメモという形で始まった。
 - (4) 次のそのカードを参考にして、手書きで文章にしていく。

(5)ここが一番時間のかかるところだ。

(6)それから、自分でそれをタイプして、いわばきれいな原稿にする。

(7)それに修正を加え、タイピストに渡して、再び修正する。

(8)だから、書いた内容はすべて、三回か四回書き直されることになる」。

4. (1)健康面については、後年問題があったにもかかわらず、全般的には生涯健康だったとハイエク本人は言う。

(2)確かに、ほぼ生涯全体を通じて健康であったと言えるだろう。

[コメント]

「法と立法と自由Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」を74歳から3年ごとに書き上げ、75歳でノーベル経済学賞を受賞し、89歳で最後の著作「致命的な思い上がり」を刊行するころまでのハイエク先生の勉強ぶりを、この文章はよく伝えてくれる。

— 2012年11月5日林 明夫記 —